

歴史的音源で検証する

20 世紀ピアノ黄金期の音色

2020 年度活動報告

歴史的音源で検証するピアノ黄金時代の音色「ショパンが弾いたピアノはどんな音色だった？」

講師：梅岡俊彦・松原聡

2020 年 11 月 13 日 大学会館ホール

ショパンの演奏を追及する方法として楽譜や人物研究からという従来の方法の他に、最近では作品と同時代のピアノ（ピリオド楽器）で演奏するという古楽的なアプローチが広まりつつある。まだ日本でも数少ない 19 世紀製のピアノを使っての演奏は確かに有効な手段ではあるが、長年の経年変化や後世の不誠実な修理改造によりショパンが弾いていたピアノからかけ離れた音色になっている物も多く、信頼性が疑われる場合も見受けられる。そこで我々は、ショパンの教えを引き継ぐ直系の弟子の歴史的録音を使ってショパン本来の演奏スタイルや音色を推測するという、新たな方法を提案したい。19 世紀後半に活動していたショパンの直弟子達の演奏は、残念ながら録音では残っていないが、まだ継承された演奏スタイルが色濃く残る孫弟子達の録音は幸い多く残されている。現在は CD や YouTube 等によりその演奏に触れる事も出来るが、デジタル化された音は余りにも情報量が圧縮され、録音した演奏家が意図した本来のニュアンスを汲み取る事は難しい。

そこで今回は、孫弟子達の演奏が録音された当時のオーディオ装置（1930 年製の大型蓄音器）とオリジナル音源（SP レコード）を使って聴くスタイルを実行した。蓄音器は梅岡所有の 1930 年英国製 EMG 社 markIX という機種を使用、電気再生のオーディオが普及し始めた時代にあえて電気を使わないアコースティック再生の音色に拘り、紙を素材とした巨大ホーン使用という特異な設計の蓄音器である。使用したレコードはピアノ史研究家の松原氏が長年に渡り収集した貴重なコレクションからの提供で、共に今回東京から持ち込んだ。幸い残響豊かな会場と電気増幅を全く使わない 90 年前の蓄音器が奏でるアナログサウンドの相性も良く、予想以上に生々しいピアノ演奏を参加者に聴いて頂く事が出来た。20 世紀の科学の進展により駆逐されてしまったアナログサウンドが今のデジタルサウンドに比較しても決して劣る音質では無かった事を若い世代に伝える事が出来た事も、今回の収穫である。

今回はまず蓄音器の説明を兼ねて、同じ曲での CD と SP レコードの聴き比べを行い、90 年前の録音の情報量の豊かさを提示した。そして次にショパンが実際に演奏に使ったピアノの外見や構造を、内部写真も含めて紹介した。初期のワルシャワ時代に弾いたと思われるウィーン式メカニクのピアノは、まだ鉄骨等の補強も無く小さな皮巻きハンマーで低い張力の弦を叩く構造で、音量は余り大きくない代わりに軽妙で繊細な表現が得意であった。パリ時代のエラーール、プレイエルというフランス製のイングリッシュ式メカニクのピアノは鉄骨で補強され、強い張力の弦を大きなハンマーで叩く構造となり強靱な音色と音量を得る事が出来たので、晩年のショパンはこのフランス製ピアノを愛用し続けた。ショパンの孫弟子達もこのフランス製のピアノを始め、現代とはかなりキャラクターが違う 20 世紀初頭のピアノを演奏して録音していた。

次にショパンの孫弟子達の演奏をオリジナル音源で掛け、現代のピアノとの音色や演奏スタイルの違いを検証した。ショパンの弟子の中でポーランド派に分類されるローゼンタール、コチャルスキー、フランス派のジル、ラドワン、コルトーなどの演奏はそれぞれ個性の違いはあるもののショパン自身の演奏スタイルを色濃く受け継ぐ部分も存分に確認出来た。

次に直接の指導を受けた弟子ではないが、ショパン存命中に生まれその影響を多大に受けたピアニストとしてパハマンを紹介した。20世紀初頭最高のショパン弾きと絶賛された演奏を聴くと、直系の弟子でなくてもその演奏スタイルを濃厚に引き継ぐ者がいた事が確認出来る。今回は最後に蓄音器のモーターのトラブルが発生して予定していた最後のレコードが掛けられなかったが、ショパンの演奏スタイルを継承していた弟子達の歴史的演奏を充分検証して頂けたと思う。

最後に今回掛けた歴史的録音で演奏されたピアノと、現代のピアノの違いにも言及した。今回聴いた演奏で使用していた20世紀初頭の欧米のトップメーカーのピアノは、まだ19世紀の手工芸品的な製造スタイルを交えて丁寧に作られていたが、2つの世界大戦で業界全体が大きなダメージを受けてからは工業生産品としての側面が強くなり、音量と精密なメカニックのみ優先される個性乏しい存在になってしまった。そういう意味では今回、ショパンの伝統を引き継ぐ演奏と共にピアノ黄金時代最後の音色を聞いてもらったとも言える。これから演奏活動を目指す若い世代が今回のような忘れ去られていた過去の貴重な音楽的財産に触れる事で、今後の演奏スタイルの可能性を存分に広げられていく事を願っている。

梅岡俊彦（音楽学部非常勤講師）



レクチャーの様子



会場の様子



蓄音機